

第2回 食のみやぎ復興ネットワーク総会

2011年度の振り返りとみやぎの食をめぐる状況について

2012年7月7日、「第2回 食のみやぎ復興ネットワーク総会」が開催され、会に参加している194団体から農水畜産業者や製造加工業者、みやぎ生協の組合員ら約240名が仙台市青葉区勝山館に集まりました。

ネットワークでは、次の3つの目的に基づきながら1年間活動を進めてきました。

- ① 喪失した生産基盤の復活・再生
- ② みやぎの新しい特産品づくり
- ③ みやぎの食材を活用した商品づくり・みやぎの食産業を励ます商品づくり

幹事団体を代表して挨拶に立ったみやぎ生協の宮本弘(みやもと・ひろむ)専務理事は、志津川のカキの復興プロジェクトや仙台・宮城の伝統野菜拡大普及プロジェクト、村田町の枝豆プロジェクトなど様々な取り組みを進めてきたことを報告しました。「志津川のカキは、去年は設備等が整っていないため出荷できなかったものの、現在は順調に大きく育っています。伝統の仙台白菜は被災した沿岸の農家の協力で生産し、ネットワークを通して多くの皆さんに利用していただくことができました」。

さらに、地元のメーカーと共同で枝豆を使った味噌づくりや地場産小麦粉によるオリジナル・ラーメン開発など、ネットワークの特長である一次・二次産業者の連携を活かした加工品開発にも取り組んだこと、現在はネットワークの認知度を上げるためCMや店頭での宣伝を通して「つくる 食べる ずっとつながる」キャンペーンを展開していることなど、多彩な活動が紹介されました。「1年経過し、取り組むことがたくさん出てきています。ネットワークをさらに広げながら地域の復興に少しでもお役に立てるよう頑張っていきます」。

続いてJA全農みやぎの官澤千浩(かんざわ・ちひろ)営農企画部部長から、宮城の農畜産業の震災被害額が5,500億円にもものぼること、倒壊した農業施設の修復や津波で流された種子・肥料の損失支援など様々な支援を行ったこと、農業復興のPRや風評被害の払しょくのため首都圏を中心に消費宣伝のイベントを開催したことなどの報告がありました。「今後はさらに震災復興のスピードアップが重要だと思います。復興とはそこで暮らす農家や



みやぎ生協の宮本弘専務理事は、これまでの取り組みを報告。

住民の生活向上、地域経済の活性化のためになされるべきであり、そのためにJAグループでは地域主導型の復興具体策を策定し、支援しています」。

宮城県漁協の芳賀長恒（はが・ちょうこう）理事は、震災被害の状況、漁協組合員への被災対応などを報告した後、ボランティアや支援に対する感謝の思いを口にしました。「漁業者は海という自然に生かされ、海という自然に一瞬のうちにすべてを剥がされました。あの暗闇の避難所で、寒さと空腹の中、もう漁業はできないだろうと思いました。しかし“津波に負けるな、頑張れ”と全国の生協の皆さんが志津川を訪れ、支援をいただきました。そのことが力強い支えとなり、希望となって漁業者の背中を押ししました」。

復興に向けた取り組みは課題山積というのが実情です。「漁港の復旧は進まず、いまも1日2回浸水しています。実際船が手配できても安全に係留できる漁港や岸壁がありません」。

そんな中でも定置網漁業・沖合遠洋漁業がそれぞれわずかではあるものの復興をし、操業されているそうです。

また養殖業の復旧状況と品目別の生産実績と見込みについても報告がありました。「カキは319トンで例年の8%でしたが現在の生産者数は約400人。3,500トンを目指して頑張っています。ノリは1億3700万枚で例年の17%、生産者数は130人、5億9500万枚の目標を掲げています。ワカメは1,000人。21,000トンを目指しています。ホタテも銀ザケも出荷が始まりましたが値段が半分以下でまさに風評被害の真っただ中にさらされています。数字は厳しいがホタテは9,900トン、銀ザケは8,400トンを目指します」と話していました。

※生産実績：23年度、生産者：24年度、生産見込み：27年度

プロジェクト活動報告と2012年度活動の提起と結びのメッセージ

ネットワークでは「なたねプロジェクト」や「県産大豆を使った菓子づくりプロジェクト」など様々な商品開発に取り組んでいます。数あるプロジェクトの中から、「仙台白菜の取り組み」についてみやぎ生協の今野一彦（このの・かずひこ）農産部門統括マネージャーが報告を行ないました。

「仙台の伝統野菜であり塩害にも強い仙台白菜の生産を通じて被災者・農家の支援と食材王国宮城の復活を目指し、進めてきました」。作付は、被災した南三陸や石巻、亘理など13の農協に依頼しました。すべての作付が成功したわけではありませんが、11月には店舗で収穫祭イベントなどを実施しています。またネットワークに参加しているメーカー各社からは、タイアップ企画によるメニュー提案、レシピの店頭配布、漬け物などの加工商品開発など多岐に亘る協力がありました。このプロジェクトは社会的にも関心を呼び、ネットワーク参加団体のひとつである明成高校はこの取り組みで地元新聞社主催の「2011年

度河北文化賞」を受賞しました。

「20を超える団体のネットワークで活動がどんどん広がりました。これによって宮城の伝統野菜・ブランドをつくり上げるための一つの方向をつくることができました。仙台白菜でのネットワークを他のプロジェクトに活かすとともに、仙台白菜を柱に宮城の伝統野菜の普及と利用を高める取り組みを進めていきたいと思えます」。

JA全農みやぎの千葉和典(ちば・かずのり) 県本部長は、「ネットワーク参加の各団体も被災を乗り越えて様々な生産物を生み出しています。そういう中で商品づくりを普及させ、ネットワークを応援していくことも必要だと思います。被災地復興の取り組みとして旬を大切にされた商品の開発、品揃え、企画運用を行なっていきたい」と話し、次の3項目からなる「2012年度活動の提起」を行ないました。

- ① 地域復興のための商品づくり、商品普及の取り組みをさらに進める。
- ② ネットワーク参加団体の活動の“見える化”を進める。
- ③ 「買い支える活動」の拡大を進める。

最後に、東北国分(株)の降幡進(ふりはた・すすむ) 代表取締役社長から、閉会の挨拶としてあらためてネットワークへの結集を呼びかける力強いメッセージが発信されました。「あの東日本大震災から立ち直って真の復興と地域の再生を実現するには、これから非常に長い年月が必要だと思います。しかしどんなに時間がかかろうとも、本日お集まりの方々が心をひとつに、元気な宮城、元気な一次産業をつくるんだという強い思いを結集していくことが、この復興に向けての大きな力になると思っています」。



会場ロビーにネットワークのプロジェクトを紹介するパネルと開発商品が展示されていました。